Hirosaki University Repository for Academic Resources

Title	17世紀世界経済とオランダ商人ブルラマッキ家の経済活動に関する経済史的研究
Author(s)	中澤，勝三
Citation	
Issue Date	1998-03
URL	http://hdl.handle.net/10129/1582
Rights	
Text version	publisher

HIROSAKI UNIVERSITY

http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/

文部省科学研究費研究成果

研　究　課　題

「１７世紀世界経済とオランダ商人ブルラマッキ家の経済活動に関する経済史的研究」

（課題番号０８６３００６７）

平成８・９年度　科学研究費補助金
（基盤研究　Ｃ）（2）

平成１０年３月

研究代表者　中　沢　勝　三
（弘前大学人文学部）

目　　次

１．はしがき　1.

２．研究の目的と方法　2.

３．１７世紀オランダと世界経済　3.

４．ブルラマッキ家の経済活動　4.

５．ブルラマッキ文書の内容　6.

付録・文献目録　11.

1．はしがき

本研究は，研究代表者である弘前大学人文学部の中沢勝三によって，平成８年度と平成９年度の２カ年間にわたっておこなわれたものであるが，この間の研究組織と研究経費，並びに研究成果の発表等の状況は以下のとおりである。

（研究組織）

研究代表者　中　沢　勝　三　　（弘前大学人文学部教授）

（研究経費）

平成８年度　　１６００千円

平成９年度　　５００千円

計　　２１００千円

（研究発表）

１）　学会雑誌・著書等

(1)　中沢勝三（共著）『現代ヨーロッパ経済史』原輝史・工藤章編，有斐閣，１９９６年
第４章「ベネルックス」を担当執筆

(2)　中沢勝三（共著）『家と共同体ー日欧比較の視点からー』岩本由輝・國方敬司編，
法政大学出版局，１９９７年
第９章「ヨーロッパの商人共同体」を担当執筆

２）　口頭発表

(1)　中沢勝三「近代世界の形成とアントウェルペン」（青森県高等学校教育研究会平成９年度大会地理歴史公民科部会世界史分科会講演），青森県立浪岡高等学校，平成９年８月２１日。

２．研究の目的と方法

１．　研究の目的

本研究においては，１７世紀のヨーロッパ世界経済の中心国であるオランダ連邦共和国の経済的基盤となった通商・海運，そして国際的商業貿易の実態を，個別の貿易商人の活動に照らして解明することが目的である。具体的には，トリップ Tripp　家等と並ぶブルラマッキ Burlamacchi　家の１７世紀後半の時期における世界的な交易活動を記録した８６０余のアムステルダム市古文書館所蔵のマイクロフィッシュ化された史料を主たる素材として，そのヨーロッパ内交易，また世界的規模での経済，交易活動を復元し，当時のオランダ経済を，ヨーロッパ経済，さらには形成発展しつつある世界経済のパースペクティヴにおいて位置づけるべく研究を行う。

２．　研究の実施計画

本研究の目的は個別商人レベルでの経済活動の復元とその経済史的検証である。トリップ家，その他個々の商人の経済・交易活動を文献で検証するとともに，他方ではアムステルダム市古文書館所蔵のブルラマッキ家文書(Burlamacchi家の各種通商貿易文書 Inventaris van het Archief Burlamacchi (1665-95)) を，その通商活動の実態を復元・集計・分析し，可能なかぎり時系列的，かつ交易相手地域別にその全体像を明らかにする研究を行う。以上の手続きを経る過程で，ブルラマッキ商家が当時形成されつつあった１７世紀世界経済，並びにオランダ経済において果たした役割と位置を明らかにする研究作業を行う。

同時に，上に述べた実証的研究成果の位置を見定める上で，当時のオランダ経済，とくにその通商活動の詳細と全体像の成果について，ヨーロッパ経済史，国際通商経済史の個別研究文献から最新の成果によってフォローし，トリップ家，ブルラマッキ家の実態を位置づける作業を行う。

以上の研究によって，近代世界経済の形成に与かって大きな力のあったヨーロッパ勢力の中で，その先駆け的役割を演じたオランダ経済，そして商業，それらを担ったオランダ商人の活動の総体的意義が経済史的に位置づけられ明らかになる。

３．１７世紀オランダと世界経済

１．オランダとヨーロッパ世界経済

「ヨーロッパ世界経済」の中核は，１６００年頃までに北西ヨーロッパに定着した。ホラントとゼーラント，ロンドンと周辺諸州，イースト・アングリア，北フランスと西フランスであったが，この間，「ヨーロッパ世界経済」のなかで傑出した地位を占めたのはオランダ連邦共和国であった。オランダは，１６００年から１６７５年頃までにかけて，農＝工業における生産効率の点で圧倒的優位にたった結果，世界商業の面で優越することができた。こうした商業上の優位は，世界商業センターとしての利益と，運輸・通信・保険などの優位によって得られる利益によって，金融部門での支配的地歩をももたらすこととなった。

同時に，この時期，英国は１６４０年代以降の市民革命期における政治・社会・経済面における混乱によって，大陸，ことにドイツにおいては，１６１８年から１６４８年までの三〇年戦争による政治・経済両面の混乱期によって，フランスはフロンドの乱による王政対貴族間の対立によって，いわば三竦み的状況により，オランダのヨーロッパ経済・政治に対する主導性が現出することになった。

２．工業国としてのオランダ

１７世紀オランダ工業の発展は繊維産業において，とりわけ「新毛織物」産業がレイデン市に集中する形で発展した。オランダの新毛織物工業（軽毛織物）は，１６世紀後半以降南ネーデルラントから移住した産業人によって移植されたものが発端となったもので，その高度な繊維工業技術が北部ネーデルラント，つまりオランダに移しかえられたものであった。当時，オランダの毛織物，麻織物を軸とする繊維工業技術はヨーロッパ最先端の技術を擁し，英国のそれをはるかに凌駕するものであった。また，オランダの毛織物工業は，すぐれて都市的性格を有し，英国の農村工業として発達した毛織物工業とその特質を異にしていた。１７世紀の後半までは技術力，生産量において突出したものを有していたが，それ以後重商主義政策を本格的に打ち出した英国工業力の前に次第に衰退への道を辿ることになる。

３．商業・通商国としてのオランダ

１７世紀の中葉において，オランダは英国の１０倍もの商船船舶保有量を誇り，他を圧する海運国家であった。とりわけ，「母なる交易」といわれたバルト海地域からの穀物輸出交易の大半を担うことによって，東ヨーロッパと西・南ヨーロッパとの中継貿易国家として繁栄した。市民革命下の英国が度重なる航海法を制定し，オランダの中継商業を排除し，それに乗る方法で自国の海運力を育成しようとしたことは歴史的常識に属する事実といっていい。このことから，オランダ有数の個別大商人であるブルラマッキ商家の交易実態を解明する課題が生じてくる。

4．ブルラマッキ家の経済活動

1．ブルラマッキ家

ブルラマッキ家，及びブルラマッキ商会の歴史はビッキ Bicci によって包括的に描かれている。ビッキの研究は，この家の起源が中世末期のルッカ Lucca という北イタリアの商業都市にあるこ とを明らかにした。ブルラマッキ一族に関する最初の記述は１３世紀末のものであるが，この時に他の地方的商家とともに，この一族がこの都市において権力を掌握したのである。この後，この一族は，フランドル，フランス，ドイツ，スペインはもとよりとして，イタリアにおいても活動をした最も重要なイタリアの商家の一つにまで発展した。

宗教改革は，この家族の歴史に分裂を画した。ブルラマッキ家の一部は正統派的なカトリック信仰に忠実であったが，他方で他の一派はカルヴァン派に移行し，それ故にイタリアを離れなければならなくなった。イタリアを離れたグループのなかで最も重要だったのは，ミシェル・ブルラマッキ Michele Burlamacchi とファブリツィオ・ブルラマッキ Fabrizio Burlamacchi であって，彼らはそれぞれ１５８５年と１５９１年にジュネーヴに到着した。彼らはがて新しいヨーロッパの経済的中心地となったアムステルダムに注意を向けた。

ブルラマッキ家の構成員のアムステルダムとの商業上の接触は，１７世紀の初頭から知られるようになる。まず，最初に，彼らはフェルディナンド・ブルラマッキのように訪問商人として現れるが，やがて家族の構成員がアムステルダムに定着するようになった。これらのうちの最初の人物は，ミシェルの息子のフィリッポ・ブルラマッキ Filippo Burlamacchi（１５７５年－１６５３年）より，彼は１６００年より少し後になってからアムステルダムに来住した。彼は，同国人のヤン（実際にはジョバンニ Giovanni)カランドリーニ Calandrini と共同して，１６０５年にアムステルダムに商社を創設した。１６０８年に，彼は，共同経営者の娘であるエリザベス・カランドリーニと結婚したが，その後まもなく彼はロンドンに移った。ビッキは，彼がその後イギリスの金融界において演じた重要な役割を叙述している。

フィリッポがアムステルダムから離れたあと，第二番目のブルラマッキ家の構成員がこの都市に来るまで半世紀以上の月日が経った。これは，ジュネーヴへの，もう一つの逃避者であるファブリツィオの子孫であった。１６６１年かそれ以前に彼の孫であるジョバンニ，別名ジャン・ブルラマッキ Giovanni or Jean Burlamacchi（１６３３年から１６６４年）が，アムステルダムに定着し，そこで彼はアンナ・マリア・レステヴェノン Anna Maria Lestevenon（１６３６年から１７２８年）と結婚した。

ジャン・ブルラマッキとアンナ・マリア・レステヴェノンの結婚はこれら両家が結びつく３つの結婚の最初のものとなった。１６９３年に，彼らの息子のダニエルが，彼の最初の従兄弟のサラ・ファン・ライセン Sara van Tijssen と結婚し，そして１７２５年に彼らの孫のアンナ・マリアが第二の従兄弟のヤン・ヘンドリック・レステヴェノン Jan Hendrik Lestevenon と結婚したのである。レステヴェノン家との同族結婚は，ヤン・ブルラマッキの子孫がオランダの改革派でなくワロン派の改革派に入信した理由の一つである。というのは，レステヴェノン家はすでにワロン派に入っていたからである。

ヤン・ブルラマッキの結婚はエリザベス（１６６２年ー没年不詳）とダニエル（１６６４年ー１７２５年以前）の二人の子供を残した。エリザベスはニーム出身の商人であるヤン・ドゥ・ブルク Jan du Bourg （１６４９年ー１７２７年）と１６８１年に結婚した。彼らは９人の子供をもうけたが，子供たちは両親の生活水準を維持することは出来なかった。その例をあげると，彼らの息子のルイ・ファブリキウス・ドゥ・ブルク Louis Fabricius du Bourg （１６９３年ー１７７５年）は，アムステル教会の寺男以上の高貴な地位を得ることは出来なかった。１６９３年に結婚したダニエル・ブルラマッキとサラ・ファン・ライセン（１６７５年ー１７５８年）は６人の子供をもうけ，そのうち４人が成人に達した。このなかでアンナ・マリア（１７０４年ー１７７６年）ただ一人が結婚生活に入ることが出来，残りは一人息子のヤン（１６９４年ー１７３２年）を含めて３人が独身のままで，ブルラマッキ家は１７３２年のヤン・ジュニアの死によって男系が絶えた。

アムステルダムに商家を開いたのはヤンの父親の意図であったことはたしかである。とはいえ，この計画は，１６６４年の彼の早世によって頓挫し，彼の婦人ーー彼女は彼よりも６０年以上も生きたーーに二人の子供を残した。商社を創設する仕事はヤンの弟のベンジャミン Benjamin に残された。ベンジャミンは，ジュネーヴからアムステルダムへ移ることを彼の父のヴインツェンツォVincenzo によって託されたのである。

２．ベンジャミン・ブルラマッキ Benjamin Burlamacchi

ベンジャミン・ブルラマッキは１６４３年にジュネーヴに生まれた。したがって，彼の兄の死がその地での商売を続けるためにアムステルダムに向けて彼が出発するサインを与えたとき，２０代に達したばかりであった。彼が１６６５年にそこに住んでいたこと，また彼がアムステルダムで市民権を手に入れた際，すでに６年が経っていたことが確かなこととして知られている。彼は長いこと結婚せずにいて，彼が１６８１年にハールレム出身のウィルヘルミナ・ファン・デア・ホープ Wilhelmina van der Hoopーー彼女はレイデンの住民であったコルネリス・デ・コーニン Cornelis de Koningh の未亡人であったーーと結婚したのは１５年ばかりのちのことであった。この結婚で，彼は，兄と彼の子供によって設定されたアムステルダムのワロン系，ないしこの集団の家族と結ぶという型から脱した。ベンジャミンの結婚はワロン系とのものでもなく，またアムステルダム系とのものでもなかった。

１６９０年にベンジャミン・ブルラマッキは，オランダ東インド会社（ＶＯＣ）に入って東インド交易を開始することにした。１６９１年の５月に彼はフランス人のナタナエル・ゴーティエ Nathanael Gautier にアムステルダムでの事業を託してシルヴェルステイン号に乗ってハタヴィアに旅立った。とはいえ，１６９８年に，ベンガルでのＶＯＣの主要な商人になっていた彼がその前年に死去していたとの報が届いた。

ベンジャミン・ブルラマッキの交易・商業活動の詳細な内容については，今後の中沢の研究課題のメイン・テーマとなるものである。ここでは，その詳細に触れることが出来ないことをお断りしたい。

5．ブルラマッキ文書の内容

1．　ブルラマッキ文書の主要な内容

本文書は，ブルラマッキ文書と名付けられてはいるものの，そこれは家族文書ではない。ベンジャミン関係の記録が主であり，またブルラマッキ商会の文書は少ない。

文書は，おおよそ４つに区分される。簿記，訴訟・紛争関係の記録，ブルラマッキ交易会社関係の記録，それに通信文書である。

簿記は厳密な意味での貸借対象表や現金出納帳などの文書と，それ以外のレシートや貸方・借方の帳簿類に分けられる。第二の訴訟関係の文書は当事者のアルファベット順に並んでいる。第三のブルラマッキ商会関係の文書は，為替証書や特許状などから成っている。

本文書の最大の部分をなすのは通信関係の文書である。これらは三つのカテゴリーに分けられる。発信書簡，到着書簡で，これはビジネス関係のものと個人的なものに分けられる。

大要，文書はフォリオ別に下記のように区分される。

(1)　簿記帳簿類　No.１－４５（これは当該ブルラマッキ文書のNo.である）

(2)　訴訟・紛争関係文書　　No.４６－６１

(3)　ブルラマッキ商会関係文書　No.６２－７１

(4)　通信書簡　No.７２－８５２
　　うち，ビジネス関係　No.７３－７９２
　　個人関係　　No.７９３－８５２

2．文書通信の相手先一覧

相手先の地名が不明なものもあるが，明記されている文書の相手先は下記の通りである。
（オランダ語表記，アルファベット順）

(1)　ネーデルラント及び植民地

AMSTERDAM　（アムステルダム）
ARNHEM
BLOEMENDAAL
DELFT
ENKHUIZEN

GOUDA
's-GRAVENHAGE
HAARLEM
HARDERWIJK
HARLINGEN
's-HERTOGENBOSCH
HILVERSUM
HOORN
LEIDEN
MIDDELBURG
NAARDEN
NIJMEGEN
ROERMOND
ROTTERDAM
UTRECHT
ZWOLLE

BATAVIA (バタヴィア)
CURACAO

(2) ベルギー
ANTWERPEN
BRUGGE
BRUSSEL
GENT (ヘント, ガン)
HASSELT
LEUVEN
LUIK

(3) デンマーク
KOPENHAGEN

(4) ドイツ
AUGSBURG
BAUTZEN
BERLIJN (ベルリン)
BRUNSWIJK
DRESDEN

ERFURT
FRAKFORT（フランクフルト）
FROBURG
GOTHA
HAMBURG
HANAU
HANNOVER
HEIDELBERG
HELMSTADT
HERFORD
HILDESHEIM
JENA
KEULEN（ケルン）
LANGENSALTZ
LAIJBACH（LJUBLANA）
LEIPZIG
LINDALO
LINDAU
LUBECK
MAINZ
MELLE
MINDEN
MONTHABOUR
MUNCHEN
MUNSTER
MAUMBURG
NEURENBERG
OSNABRUCK
REGENSBURG

(5) 英国（Engeland）
LONDEN　（ロンドン）
YARMOUTH

(6) フランス
AMIENS
AUXERRE
BESANCON

BORDEAUX　(ボルドー)
LILLE
LYON　　(リヨン)
ST.MALO
MARSEILLE　(マルセイユ)
NANTES　　(ナント)
PARIJS (PARIS)　　(パリ)
REDON
REIMS
LA ROCHELLE　(ラ・ロシェル)
ROUAAN (ROUEN)　(ルーアン)
SEDAN
STRAATSBURG
USEZ (ARZISCE)

(7) イタリア
ANCONA
BASSANO
BOLOGNA
BOLZANO
BRESCIA
CHIETI
CREMONA
FLORENCE
FOLIGNO
GENUA (GENOVA)　(ジェノヴァ)
LIVORNO
MANTUA
ST.MARTINO
MESSINA
MILAAN　(ミラノ)
NAPELS　(ナポリ)
PADUA
PARMA
PAVIA
PESARO
PIACENZA
PONTINI

ROME　　(ローマ)
TERNI
TURIJN (TORINO)
VENETIE
VERONA

(8) オーストリア
GRAZ
INNSBRUCK
LINZ
SALZBURG
WENEN (WIEN)
WOLFENBUTTEL
ZITTAU

(9) ポーランド
BRESLAU
BRIEG
DANTZIG

(10) ポルトガル
LISSABON　(リスボン)
ST.MARIA
PORTO

(12) ロシア
REVAL
RIGA

(13) スペイン
BARCELONA
BILBAO
CADIX
MADRID
MALAGA

(14) スイス
BAZEL

ST.GALLEN
GENEVE　(ジュネーヴ)
ZURICH

以上の多岐の地域国々にまたがっており，内容も広範囲なものであるので，これらの文書の詳細な分析・集計については，今後のリサーチと研究を待たなければならない点が多い。

〔付録・文献目録〕

(1) ブルラマッキ文書　Archief Burlamacchi
INVENTARIS VAN HET ARCHIEF BURLAMACCHI (1665-1695)
International Trade from 17th Century Amsterdam
THE BURLAMACCHI ARCHIVE
Gemeentearchief Amsterdam

(2) R. Baetens, De Nazomer van Antwerpens welvaart. De diaspora en het handelshuis De Groote tijdens de eerste helft der 17de eeuw, Brussel, 1976.

(3) P. W. Klein, De Trippen in de 17e eeuw, Assen, 1965.

(4) E. Stols, 'The Southern Netherlands and the foundation of the Dutch East and West India Companies', in: Acta Historiae Neerlandicae, Vol. IX, 1976.

(5) 石坂昭雄『オランダ型貿易国家の経済構造』，未来社，１９７１年

(6) 上野　喬『オランダ初期資本主義研究』お茶の水書房，１９７３年

(7) 中沢勝三『アントウェルペン国際商業の世界』，同文舘，１９９３年

以　上